

平成25年度全学英語カリキュラムにおける調査報告
: TOEICスコアと選択科目の受講動向を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 厨子, 光政, 高瀬, 祐子, 松野, 和子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008799

平成 25 年度全学英語カリキュラムにおける調査報告

—TOEIC スコアと選択科目の受講動向を中心に—

厨子光政（静岡大学 情報学研究科）

高瀬祐子（静岡大学 大学教育センター）

松野和子（静岡大学 大学教育センター）

1. はじめに

静岡大学の全学英語教育における平成 25 年度カリキュラム（以下、現行カリキュラム）が施行されて 2 年目となり、学生の大まかな受講動向がみえてきた。本稿の目的は、TOEIC スコアを軸として 2013 年度と 2014 年度の英語選択科目の履修動向の分析を行い、さらに充実した全学英語教育の実施に貢献することである¹。カリキュラム作りは、その時々要求される教育観を含め、これまで築き上げられてきた教育観や教育目標を実現する基盤的手段である。一方で、カリキュラム作りは複数の判断の集合体から成る 1 つの決断であり、判断の原拠となる教育理念は唯一無二ではないため、誰しもが必然的に到達する客観的帰結はない。学生による授業評価において高評価を得ていることを根拠にカリキュラムの変更は必要ないという判断もあれば、同じカリキュラムについて英語能力の向上を効率的に実現することを目標として学生に好評であるカリキュラムを根本から改変するという判断もあるだろう。客観的データをどのように分析・解釈するか、各部局の要望や展望を聴取して何を残して何を発展的に解消するかは、カリキュラム作成者の判断に委ねられる。本稿では、静岡大学の全学英語カリキュラムにおける選択科目に対する「判断」の変遷をまとめ、「利用可能な人的・物的資源に応じて現実的に対処」（小町他 2014）するという視点から、実施から 2 年目の後学期を迎えた時点での現行カリキュラムの調査報告を行う。

2. 静岡大学におけるカリキュラムの変遷

選択科目の観点から、静岡大学の全学英語教育におけるカリキュラムの変遷を振り返ってみると、平成 4 年度(1992 年度)までは、原則として通年科目のみを設置するカリキュラムが続き、4 科目 8 単位が必修で選択科目は存在しなかった。必修科目のうち 3 科目は指定クラスであり、1 科目は学生が授業内容（英会話、時事英語、映画、小説、英作文など）によってどのクラスを受講するかを選択できるよう設計されていた。成績評価に関しては、授業内容によって受講するクラスを選択できる 1 科目においても指定クラス 3 科目においても、教材や評価方法は基本的に担当教員の裁量に任されていた。

平成 5 年度(1993 年度)からは、1 年次と 2 年次に年 1 科目開講される必修通年科目と平行して、半期 1 単位の選択科目が 1 年次前学期から 2 年次後学期まで開講された。選択科目として、英会話、聴解、講読、表現法の技能別の科目が設置され、学習したい授業内容によって学生がクラスを選択した。通年 2 単位科目と半期 1 単位科目が混在していたが、大多数の学生が 1 年次と 2 年次を通して週 2 回の英語を受講しており、合計 8 単位を履修していた。この時期までは、英会話などの一部の授業を除き、1 クラスの受講人数が 60 人を超えることも珍しくなく、語学の授業としては決して望ましい状況ではなかったが、週 2 回の受講機会を提供するためには致し方ない面もあった。

平成 12 年度(2000 年度)には、全科目を半期科目にする動きと非常勤講師の削減方針とが相まって、4 科目 8 単位を必修とするカリキュラムが設定され

た。これまで半期1科目1単位を修得させていたが、平成12年度では半期1科目2単位とし、合計修得単位数は変わらないが学習時間数を半減させた²。一方で、学習時間数の減少によって、クラスサイズを40名程度に抑えることが可能になった。カリキュラム設計を根底から改変したという意味で画期的なものではあったが、授業内容などは以前のカリキュラムの必修部分を基本的には踏襲するものであり、学習時間数の減少とクラスサイズの少人数化のみに特徴づけられるカリキュラムであったといえるかもしれない。

平成18年度(2006年度)のカリキュラム改革では、より実用的な英語学習にすること、同一科目における授業内容と評価基準の統一、国際化に対応できる人材育成など当時の教育観の実現に向けたカリキュラムの改善が行われた。具体的には、TOEIC対応科目を必修化し、期末試験に外部検定試験であるTOEIC IPテストを導入して、共通シラバスに基づいた授業運営と統一の成績評価基準が採用された³。加えて、平成18年度カリキュラムでは、習熟度別のクラス編成を導入した。学生を上級レベルのPower English コース(以下、PEコース)とStandard English コース(以下、SEコース)に分け、SEコースをさらに習熟度別に中級クラスと基礎クラスに分けた。大学センター入試点数とPEコース受講の希望意思に基づき、PEコースの受講生が決定され、入学者およそ2000名のうち、PEコースの受講を希望する学生の中からセンター入試上位300人の学生がPEコース科目の受講者として選抜された。また、平成18年度では、最大科目数及び単位数を6科目12単位(4科目8単位の必修科目に加えて2科目4単位の選択単位)とし、学習時間数を増加させることに成功した。PEコースの学生は6科目すべての科目を基本的に履修することになっており、SEコースにおいてもほぼ全員の学生が選択科目を履修していた。このように、学生は6科目12単位を実質的に履修していたため、4科目8単位を必修としていた以前のカリキュラムと比較

すると、学習時間数は1.5倍に増加した。

以上が、平成25年度(2013年度)から始まった現行カリキュラムに至るまでの大まかな変遷である。

3. 現行カリキュラムの概要と特徴

「人的・物的資源」の再配分により、現行カリキュラムでは、理論上は最大10科目18単位以上の英語科目を受講できるように設計されている。必修単位を2科目2単位に絞り込み、選択単位の上限を大幅に広げ、履修条件がTOEIC 500点以上の上位クラス受講者では、集中講義等を除いた定期開講授業だけでも理論上は8科目16単位以上を受講できるようになっている⁴。一方で、TOEICスコア400点以上が履修条件となっている中位クラス受講者は、4科目4単位の選択科目が準備されている。このようなシステムの背後には、一律に全員の学習時間数を増加させるのではなく、資源の分配として、一定のレベルに達した意欲のある学生にはいくらかでも学習できる環境を提供し、英語学習を望まない学生は最小限の学習で卒業できるという、学生の主体性に基づいた考えがある。また、400点台スコアの学生が、500点以上科目を受講したければ、そのレベルに到達するための自らの努力を促すという考えも背後にある。現行カリキュラムでは、そのような学生へのサポートにも資源が割かれており、どの学生も自由に参加することができる補習が週1コマ分開催されている。

平成18年度カリキュラムと現行カリキュラムにおいて最も異なる点は、平成18年度カリキュラムでは実質的に6科目12単位の履修が学生に求められていたのに対して、現行カリキュラムは必修の2科目2単位にプラスして大幅な自由度が許された選択科目から構成されている点であるといえる。詳細な比較は小町ら(2014)で記述されているため、ここで繰り返すことはできるだけ避け、必修科目を最小限にし、学生の自由度がより高くなった現行カリキュラムにおける学生の受講動向に焦点を当てて議論する。

現行カリキュラムの特徴の1つは、TOEIC スコアを選択科目の履修条件とすることである⁵。豊富に準備された選択科目を受講するには、1 年次前学期の必修科目「英語演習 I」の合格基準である TOEIC 400 点以上のスコアをクリアすることが最低限の条件となっている⁶。平成 18 年度カリキュラムにおいても、「TOEIC400 点」は 1 年次前学期の必修科目「TOEIC 演習」の可否に大きく影響する基準であったが、400 点未満の場合でも授業の平常点によって単位を修得することが可能であった。これに対して、現行カリキュラムでは TOEIC400 点に満たなければ一律で不合格となり、実質上の再履修科目として後学期以降に開設される「基礎英語演習」の受講が義務づけられている⁷。現行カリキュラムで選択科目を履修できるかは、TOEIC400 点以上のスコアを取得し「英語演習 I」（または「基礎英語演習」）に合格しているかに依る。

前述のように、選択科目では TOEIC スコア 400 点以上、500 点以上、600 点以上の取得を履修登録する際の条件として設定している。400 点台を取得した学生が履修できる科目には 4 科目、500 点以上を取得した学生には 8 科目、600 点以上を取得した学生には 10 科目が設けられており、豊富な選択肢が準備されている 500 点以上を取得した学生に比べ、400 点台を取得した学生への選択肢は多くない。

TOEIC スコアが選択科目の受講要件として活用されることにより、学生のスコアがどのように変化したかを図 1 で概観する。

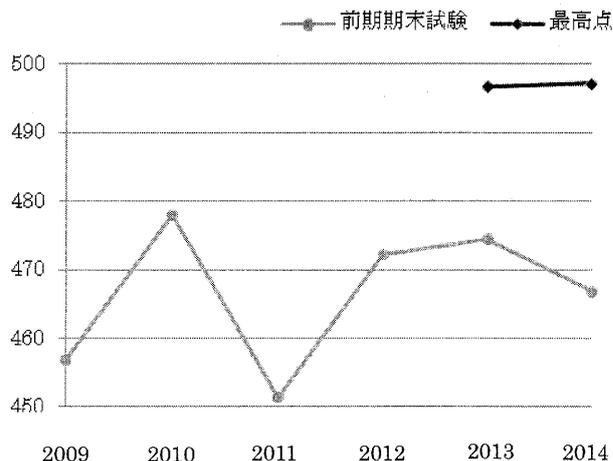


図 1. TOEIC スコア平均点の年度別推移⁸

1 年次前学期必修科目「英語演習 I」（2012 年度以前は「TOEIC 演習」）の期末試験として実施される TOEIC 試験のスコア自体には、平成 18 年度カリキュラムから現行カリキュラムへと移行したことによる大きな変化はみられない。注目すべきは、期末試験の平均スコア(2013 年度 474.5 点/2014 年度 466.9 点) に比べ、選択科目の受講要件となる「後学期の履修登録日前までの最高スコア」の平均(2013 年 496.8 点/2014 年度 497.2 点)がおおよそ 30 点上回っている点である。これは、1 年次後学期以降の英語選択科目の履修条件となる TOEIC スコアに、前学期の期末試験として実施される TOEIC に加え、学内で行われる団体試験 (TOEIC IP 試験) や TOEIC 公開テストのスコアを利用することができ、複数のスコアを有する場合はその最高スコアが用いられるためであると考えられる。また、前学期開講期間中に TOEIC を複数回受験した場合、最高スコアが「英語演習 I」の成績評価として使われるため、複数回受験した学生が増加したこともスコア上昇の理由の一つとして挙げられる。

結果として、「英語演習 I」の合格ラインである 400 点をクリアするため、あるいはより良い成績評価を得るため、期末試験として受験する TOEIC 以外にも積極的に学生が TOEIC を受験する動きが現れている。入学後から 1 年次前学期期末試験以前の間実施された TOEIC スコアが、後学期選択科目

の受講資格スコアとして登録された学生は、2013年度430名、2014年度703名となっている。この数値は後学期選択科目の受験資格を獲得した学生数であり、必ずしも1年次の受験者数そのものを示すものではないが、多くの学生が期末試験前から400点以上の獲得に努力していることが分かる⁹。

参考として、静大情報学部広報委員会が編集した保護者向けニュースレター「Joy 風」(2014)のデータを紹介しますと、浜松キャンパスの大学生協書籍部が2014年4月から7月までに販売した書籍のベストセラーは、群を抜いてTOEIC学習参考書・問題集であった¹⁰。109部の売り上げを誇る『TOEIC TEST 英単語スピードマスター』のみではなく、TOEIC関連書籍でトップ10に入ったものは計6冊あり、その総売上数は260部に及んだ。トップ10書籍全体の売り上げ合計458部の中でその56.8%を占めていること、また2位の書籍が62部であることを考え合わせると、TOEIC関連書籍がいかに「人気」書籍であるかが分かる。学生の学習意欲が向上したから(正の誘因)か、あるいはTOEIC400点をクリアしなければ必修科目の単位を修得できずに選択科目を受講できないという「望ましくない結果の回避」なのか(負の誘因)など、主たる動機づけの要因分析については今後の課題として、学生が自主的にTOEIC受験に関心を寄せていることは明白であるといえよう。

表1はTOEIC400点未満を取得した学生数の推移を表したものである¹¹。

表1. TOEIC400点未満を取得した学生数の推移
(名)

年度	前学期期末試験スコア	最高スコア
2009	482	n/a
2010	359	n/a
2011	573	n/a
2012	412	n/a
2013	383	237
2014	475	195

表1における前学期期末試験の学生数に対してカイ二乗検定を行った結果、学生数に有意な差があることが分かった($\chi^2(5)=69.17, p<.01$)。差があった年度を特定するため、ライアンの名義水準を用いた多重比較を行った結果を表2に示す。

表2. 前学期期末試験の学生数に対するライアンの名義水準を用いた多重比較の結果

年度別比較	臨界比	p	名義水準
2009 > 2010	4.21 *	<.0002	0.00417
2009 < 2011	2.77 *	.0054	0.01667
2009 = 2012	2.31 <i>ns</i>	.0208	0.00833
2009 > 2013	3.33 *	.0008	0.00556
2009 = 2014	0.19 <i>ns</i>	>.05	0.01667
2010 < 2011	6.98 *	<.0002	0.00333
2010 = 2012	1.87 <i>ns</i>	>.05	0.00833
2010 = 2013	0.84 <i>ns</i>	>.05	0.01667
2010 < 2014	3.98 *	<.0002	0.00556
2011 > 2012	5.10 *	<.0002	0.00556
2011 > 2013	6.11 *	<.0002	0.00417
2011 > 2014	3.00 *	.0026	0.00833
2012 = 2013	0.99 <i>ns</i>	>.05	0.01667
2012 = 2014	2.08 <i>ns</i>	.0366	0.01667
2013 < 2014	3.11 *	.0018	0.00833

注: 有意水準 $\alpha=.05$

A > B は A の学生数が B の学生数より多いことを示す。

A < B は A の学生数が B の学生数より少ないことを示す。

表2のように、期末試験単独では、概して、平成18年度カリキュラムと現行カリキュラムの間に大きな差はない。一方、2009年度～2012年度における期末試験スコアと2013年度～2014年度における最高スコアを比較してみると、学生数に有意な差があった($\chi^2(5)=275.53, p<.01$)。表3は、ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果である。

表 3. 最高スコアによる学生数に対する
ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果

年度別比較	臨界比	p	名義水準
2009 > 2010	4.21 *	<.0002	0.00833
2009 < 2011	2.77 *	.0054	0.01667
2009 = 2012	2.31 <i>ns</i>	.0208	0.01667
2009 > 2013	9.10 *	<.0002	0.00556
2009 > 2014	10.99 *	<.0002	0.00417
2010 < 2011	6.98 *	<.0002	0.00556
2010 = 2012	1.87 *	>.05	0.01667
2010 > 2013	4.96 *	<.0002	0.01667
2010 > 2014	6.93 *	<.0002	0.00833
2011 > 2012	5.10 *	<.0002	0.00833
2011 > 2013	11.77 *	<.0002	0.00417
2011 > 2014	13.6 *	<.0002	0.00333
2012 > 2013	6.83 *	<.0002	0.00833
2012 > 2014	8.77 *	<.0002	0.00556
2013 = 2014	1.97 <i>ns</i>	.0478	0.01667

注: 有意水準 $\alpha = .05$,

A > B は A の学生数が B の学生数より多いことを示す。

A < B は A の学生数が B の学生数より少ないことを示す。

現行カリキュラム(2013年度・2014年度)での最高スコアに着目すると、平成 18 年度カリキュラム(2009 年度・2010 年度・2011 年度・2012 年度)に比べ、TOEIC400 点未満を取得した学生数が有意に減少していることが分かる。必修単位の取得

や後学期選択科目の履修に加え、「英語演習 I」に不合格だった学生が前学期期末試験以降から後学期履修登録開始以前までの期間に 400 点を取得することで、「英語演習 I」に合格(評価は可)するという特別措置があることも学生の努力を促す大きな要因となっていると考えられる¹²。このように、一度だけの試験結果(期末試験)ではなく、一定期間における学習成果(最高スコア)を成績評価や履修条件に採用する仕組みは効果的に機能しているといえるだろう。

選択科目を受講するには、まず、400 点以上という履修条件を満たす必要がある。何よりも前学期に不合格となった必修科目「英語演習 I」の単位を修得しないと卒業できない。これら 2 つの必須要件を同時に満たす機会として、「英語演習 I」の実質的な再履修科目である「基礎英語演習」が現行カリキュラムでは設置されている。これは、意欲・学力ともに不足ぎみな学生にも「最低限の学習を要求する」(小町他 2014)ためである。

表 4 は、2013 年度入学者を対象に、TOEIC400 点に満たなかった学生数の推移を示したものである¹³。表 4 に基づいて、TOEIC スコア 400 点未満の学生総数の推移を比べた結果、有意な差がみられた($\chi^2(2) = 31.14, p < .01$)。

表 4. TOEIC スコア 400 点未満の学生数の推移

(名)

学期	学部						計
	人	教	情	理	工	農	
2013 年 10 月 (1 年次後学期 開始前)	28 (23.17)	74 (85.53)	15 (11.58)	35 (35.64)	68 (64.60)	17 (16.48)	237
2014 年 4 月 (2 年次前学期 開始前)	13 (15.35)	59 (56.66)	6 (7.67)	22 (23.61)	47 (42.79)	10 (10.92)	157
2014 年 10 月 (2 年次後学期 開始前)	11 (13.49)	59 (49.81)	5 (6.74)	23 (20.75)	30 (37.61)	10 (9.60)	138

注 1: カッコ内は期待度数

注 2: 各学部の正式名称を次に示す。人: 人文社会科学部、教: 教育学部、情: 情報学部、理: 理学部、工: 工学部、農: 農学部

表 5 は、TOEIC スコア 400 点未満の学生総数に対してライアンの名義水準を用いた多重比較を行った結果である。

表 5. TOEIC スコア 400 点未満の学生総数に対するライアンの名義水準を用いた多重比較の結果

学期	臨界比	p	名義水準
2013 年度 10 月 > 2014 年度 4 月	3.98 *	<.002	0.03333
2013 年度 10 月 > 2014 年度 10 月	5.06 *	<.002	0.01667
2014 年度 4 月 = 2014 年度 10 月	1.05 <i>ns</i>	>.05	0.03333

注: 有意水準 $\alpha = .05$,
 $A > B$ は A の学生数が B の学生数より多いことを示す。
 $A < B$ は A の学生数が B の学生数より少ないことを示す

2013 年後学期開始時点で、TOEIC400 点未満(「英語演習 I」不合格)だった 237 名の学生は、1 年後の 2014 年には 99 名減って 138 名となり、表 5 のとおり、2013 年度に比べ、2014 年度では 400 点未満の学生が有意に減少していることから、「基礎英語演習」という再履修対応システムは十分機能していると考えられる。

表 4 に基づいて、学部ごとに TOEIC スコア 400 点未満の学生数を比べると、全体的には有意な差はなく($\chi^2(10) = 9.61, ns$)、クラメールの連関係数を計算した結果、観測度数と期待度数が大きく異なる値は少ないことが分かった($Cr. = .095$)。しかしながら、学生数の値を個別に観察すると、工学部と教育学部を除いた学部では、ほとんどの学生が 2013 年度後学期の間に必修単位修得および選択科目受講要件を満たしたことが分かる。その中で、人文社会科学部と情報学部は学部定員の 2.5% 程度の学生を残してほとんどの学生が要件を満たしているのに対して、教育学部では 15% 近い学生が 400 点というハードルを乗り越えられないでいる¹⁴。

4. 選択科目受講者数

現行カリキュラムが実施された 2013 年度では、平成 18 年度カリキュラムを踏襲し、必修科目に対して、上級レベルのクラスを受講する「意欲を問う」調査をしたが、2014 年度からは上級レベルの履修を希望するかどうかを前もって入学前に申告させることなく、大学センター入試試験の点数のみで習熟度別にクラス分けを行うこととなった。1 年次後学期以降は選択科目が開講され、TOEIC スコアによる履修制限はあるものの、学生は希望する科目を履修することが可能である。必修科目と選択科目の特色を考慮し、必修科目では上級レベルへの受講希望を反映させず、習熟度に応じたクラスが学生に指定される¹⁵。一方、選択科目では学生の受講希望を反映させ、500 点以上科目の履修を望まない場合には 400 点以上科目を履修することができる。言い換えれば、TOEIC500 点台取得者では、500 点以上を条件とする科目の履修も可能であるとともに、400 点以上を条件とする科目の履修を行うことも可能である。ここから、現行カリキュラムでは、学生の選択科目への受講動向を調査することによって、上位レベルの科目への履修を希望するかどうかという学生の意欲を把握することができる。

選択科目に TOEIC スコアによる受講条件をつけたカリキュラムを運営する上で難しい点は、その年度の 400 点以上の学生が何名になるか、500 点以上の学生が何名になるか、それぞれの学生がどのレベルの科目をどの程度の割合で受講するか予測して次年度の開講科目本数を決定しなければいけないことである。現行カリキュラムが初めて実施された 2013 年度は、それ以前のカリキュラムの実績を参考にしかなく、手探り状態であった。500 点以上の学生は希望する全員が 1 年次後学期の選択科目を 2 科目必ず受講でき、400 点台を取得した学生は 1 科目は必ず受講できることを保証し、開講本数の計画が行われた。

表 6. 2013 年度 1 年次後学期における 500 点以上科目の受講動向

(受講者数/クラス定員)

	時間枠				計
	人・理	教・農	人理教農	情・工	
英語演習Ⅲ	236/280	122/200	31/40	211/360	600/880
英語リーディングⅡ	166/180	46/90	開講なし	144/200	356/470
英語ディスカッション	188/208	84/104	開講なし	70/100	342/412
計	590/668	252/394	31/40	425/660	1298/1762
潜在学生数	750	404	n/a	662	1816
受講率(%)	----- 75.6 -----			64.2	71.5

注 1: 潜在学生数とは、500 点台科目受講資格者全員が受講した場合の述べ数を示す。

注 2: 各学部の正式名称を次に示す。人: 人文社会科学部、理: 理学部、教: 教育学部、農: 農学部、情: 情報学部、工: 工学部

表 6 は、2013 年度 1 年次後学期における 500 点以上科目の受講動向を示したものである。表 6 のように、2013 年度では、全体的には、履修条件を満たした学生の約 70% が 500 点台科目を受講したことが分かる。2013 年度に実際にカリキュラムが実施されてみると、500 点以上を取得した学生数が予想を遙かに超えて多かったにもかかわらず、500 点台科目の受講率はそれほど高くなりクラス定員に空きができた。その大きな原因は、500 点台スコアを取得した学生 908 人のうち述べ 210 人が 400 点以上科目を履修したためである。収容人数が潤沢でない 400 点以上科目を 500 点台の学生が履修したことによって、400 点以上科目しか受講資格がない学生の中で 2 科目を受講することを希望しても受講できない学生が 300 人余り生じた。

前述のような 2013 年度の選択科目の履修動向

に基づき、2014 年度では各科目の定員や開講本数が調整された。その結果、2014 年度の 1 年次後学期における 500 点以上科目の受講動向は表 7 のようになった。

2013 年度と 2014 年度の 1 年次後学期における 500 点台科目受講資格者の述べ数が、それぞれ 1816 名と 1824 名とほぼ同じであることを考えると、2013 年度に比べ、2014 年度では 500 点以上科目の受講者数が 1298 名から 1455 名へと 158 名増加し、8.3% 増であった。学生自身の意欲や自覚が向上したのか、各学部や授業内での指導が効を奏したのか要因を特定することはできないが、歓迎すべき傾向である。一方、TOEIC500 点台のスコアを持ちながら 400 点台科目の履修を第 1 希望とした学生は述べ 238 名で、潜在学生数の 13.1% にあたる¹⁶。

表 7. 2014 年度 1 年次後学期における 500 点以上科目の受講動向

(受講生数/クラス定員)

	時間枠			計
	人・理	教・農	情・工	
英語演習Ⅲ	295/315	140/160	257/308	692/783
英語リーディングⅡ	285/301	81/90	108/110	474/501
英語ディスカッション	140/156	77/78	72/125	289/359
計	720/772	298/328	437/543	1455/1643
潜在学生数	726	454	644	1824
受講率(%)	99.2	65.6	67.9	79.8

注 1: 潜在学生数とは、500 点台科目受講資格者全員が受講した場合の述べ数を示す。

注 2: 各学部の正式名称を次に示す。人: 人文社会科学部、理: 理学部、教: 教育学部、農: 農学部、情: 情報学部、工: 工学部

教育学部と農学部、情報学部と工学部の時間枠の受講者数は、それぞれ前年度比 3.2%増、3.7%増にとどまっているが、人文社会科学部と理学部の時間枠では前年度比 22.0%増となり、受講率がほぼ 100%であることは驚異的である。教育学部と農学部の時間枠では「英語演習Ⅲ」、情報学部と工学部の時間枠では「英語ディスカッション」における履修者数が少なく、学部によって学生が集まらない科目が異なっている。専門科目の内容や知的興味の対象との関連など、学部ごとの特色を今後はさらに検討する必要があるかもしれない。

一方、履修者がクラス定員をほぼ満たしていることは、第 1 希望者に抽選漏れが生じていることを意味するかもしれない。例えば、クラス定員総数 78 名(教農枠)の「英語ディスカッション」を第 1 希望として履修希望した学生は 125 名であり、クラス定員総数 110 名(情工枠)の「英語リーディ

ングⅡ」を第 1 希望者として履修希望した学生は 177 名であった。第 1 希望の科目を履修できなかった学生の中には、第 2 希望や第 3 希望を持たず、選択科目の履修をあきらめる学生もいるかもしれない。より充実したカリキュラム運用のために、全体総数に基づく包括的な調整だけでなく、第 1 希望者数が突出した科目の増設や第 1 希望者数の少ない科目の削減等、個別的な調整も重要となる。

次に、2013 年度入学者を対象に、2014 年度 2 年次における選択科目の履修動向を概観する。表 8 は、400 点以上科目・500 点以上科目の区別なく全科目を対象とした、2014 年度 2 年次後学期における受講動向を示したものである。受講率は、全体で 37.7%、最も受講率の高い人文社会科学部(52.9%)から最も受講率が低い教育学部(14.3%)まで幅がある。情報学部及び教育学部の受講率が低い要因の解明が必要であると考えられる。

表 8. 2014 年度 2 年次後学期における受講動向

(名)

	学部						計
	人	教	理	農	情	工	
学生総数	414	407	220	155	204	547	1947
受講者数	219	58	100	68	48	240	733
受講率(%)	52.9	14.3	45.5	43.9	23.5	43.9	37.7

注：各学部の正式名称を次に示す。人：人文社会科学部、教：教育学部、理：理学部、農：農学部、情：情報学部、工：工学部

表 9. 2014 年度 2 年次前学期における 500 点以上科目の履修動向

(受講生数/クラス定員)

	時間枠				
	人	教	理・農	情・工	計
英語演習Ⅲ	15/70	4/35	11/70	27/100	57/275
英語リーディングⅡ	41/120	9/40	32/40	68/100	150/300
英語ディスカッション	14/20	11/20	13/20	21/50	59/110
英語ライティングⅡ	59/81	12/20	29/30	52/50	152/181
計	129/291	36/115	85/160	168/300	418/866
潜在学生数	281	131	166	336	914
受講率(%)	45.9	27.5	51.2	50.0	45.7

注 1: 潜在学生数とは、500 点台科目受講資格者全員が受講した場合の述べ数を示す。

注 2: 各学部の正式名称を次に示す。人: 人文社会科学部、教: 教育学部、理: 理学部、農: 農学部、情: 情報学部、工: 工学部

表 10. 2014 年度 2 年次後学期における 500 点以上科目の履修動向

(受講生数/クラス定員)

	時間枠				
	人	教	理・農	情・工	計
英語演習Ⅲ	6/80	0/40	2/40	開講なし	8/160
英語リーディングⅡ	15/90	5/45	17/90	20/110	57/335
英語ディスカッション	9/52	3/26	9/26	3/26	24/130
英語ライティングⅡ	12/80	10/20	19/20	32/60	73/180
計	42/302	18/131	47/176	55/196	162/805
潜在学生数	280	134	170	345	929
受講率(%)	15.0	13.4	27.6	16.3	17.5

注 1: 潜在学生数とは、500 点台科目受講資格者全員が受講した場合の述べ数を示す。

注 2: 各学部の正式名称を次に示す。人: 人文社会科学部、教: 教育学部、理: 理学部、農: 農学部、情: 情報学部、工: 工学部

表 9 は 2014 年度 2 年次前学期における 500 点以上科目の履修動向、表 10 は 2014 年度 2 年次後学期における 500 点以上科目の履修動向である。表 9・表 10 と、1 年次後学期の受講動向である表 6 を比べると、受講率が甚だしく減少していることが分かる。2 年次前学期では全体のおよそ半数の学生が選択科目を受講しておらず、教育学部ではおよそ 4 名のうち 3 名は英語選択科目を受講していないことが分かる。

科目別の特徴を確認すると、「英語演習Ⅲ」の受講率が低いことがわかる。「英語演習Ⅲ」のように、科目名から授業内容が推測できず、授業内

容への教員の裁量が大きな科目では授業内容の充実がさらに求められるのかもしれない。また、1 年次では開講されていなかった「英語ライティングⅡ」の受講率が高い。1 年次に開講する科目と 2 年次に開講する科目を区別することも、選択科目の受講率を維持する 1 つの手立てかもしれない。

2014 年度では、学部合同の科目として「アカデミックイングリッシュⅠ」「アカデミックイングリッシュⅡ」「アカデミックイングリッシュⅢ」が開設され、静岡キャンパスでは履修者が 93 名であるのに対して浜松キャンパスでは 8 名であった。全体では、受講資格者 237 名のうち 101 名が履修

し、全体の 42.6%が履修登録を行ったこととなる。静岡キャンパスにおいて受講者が多かった要因と浜松キャンパスで受講者が少なかった要因を検討し、今後のカリキュラム運営の参考としたい。

5. 今後に向けて

1 年次前学期必修科目「英語演習 I」の成績評価に TOEIC を用いて、スコアが 400 点未満の場合は例外なく不合格とし、後学期からの選択科目の受講条件として TOEIC のスコアを利用した結果、多くの学生が自主的に高いスコアを取得しようと努力し、平成 18 年度カリキュラム時よりも 400 点未満の学生が大幅に減少したことは、現行カリキュラムの実績として評価できる¹⁷。

2 年次以降の選択科目受講率の減少をどう食い止めるかは急務ではあるが、簡単には解決策が見つからない可能性もある。受講希望者数の変化に合わせて開講科目本数を調整した場合でも、どの科目を減らすかが悩みの種となる。例えば、授業内容を明確にするために科目名を細分化している（「英語リーディング」、「英語ライティング」、「英語ディスカッション」等）ため、ある時間枠に 3 科目開講しているところを、受講者数に合わせて 2 科目に減らさなければならないとすると、どの科目を減らすかが悩ましい点となる。

1 つの方略としては、平成 18 年度カリキュラムのように、各学期に開講する科目名を統一して授業内容をクラスごとに変更すれば、開講本数の調整は簡単になるかもしれない。ただし、この場合は、トータルとしての受講科目数 (=履修単位数) がかなり限定されてしまい、現行カリキュラムのように 10 科目 18 単位以上の全学英語科目の履修をめざすことは不可能となる。

2 つめの方略として、「強制力」をどのように加味するかについても検討の価値があるかもしれない。「英語演習 I」の合格条件として設定されている TOEIC400 点以上という基準が、学生の好き嫌いかかわらず自主的に期末試験以外の TOEIC

を受験する動きに繋がったことに学び、自ら努力しレベルアップを図らないと卒業できないという危機感を持たせるような仕掛けを取り入れることも考えられる。

3 つめの方略としては、中位レベルの科目を増やし上位レベルの科目を減らすことである。しかし、受講者の増減に対応できたとしても、対症療法的な方法だけでは「意欲のある学生を育てる」ことはできない。学生がより高いレベルの科目を意欲的に受講するように動機づけることを並行して検討していく必要がある。現行カリキュラムでは、400 点以上科目では 1 科目 1 単位であるのに対して 500 点以上科目では 1 科目 2 単位としてインセンティブを与えているが、それだけでは十分ではないようだ。上級レベルへの挑戦を各授業内のみならず、学部でのガイダンス、セミナー、学習指導でも奨励する、英語運用能力を上げることのメリットや卒業後の展望を説明するなど、学部や就職支援・留学など各方面との協力関係のもとで学生の「意識」を育てることも効果的だろう。一方で、現行カリキュラムでは、「人的・物的資源」の再配分のもと、学習を望まない学生にも一律に資源を割いて選択科目履修を強いるのではなく、意欲的に学習を望む学生に限られた資源を割りあて、少人数クラス等、資源を有効に活用し、より充実した英語教育の実現をめざすことが基本方針である点を留意しておく必要がある。

4 つめの方略は、各クラスの授業内容の充実である。学生のニーズや興味、将来の展望に沿う授業内容、専門科目内容とのスムーズな接続を検討し、「魅力的な」授業を提供することによって、学生の選択科目履修を誘発する。

方略には長所と短所が存在する。その長所と短所を十分に見極め、履修動向を精査し、現実的な対応を検討することによって、全学英語教育をより充実したものにするができるだろう。

謝辞

本論文の執筆にあたり、データの収集においてご協力いただきました本学教務担当者である佐藤翠氏に深謝いたします。

注

- 1) 2年目の後学期を迎えた現時点では、ほとんどすべての科目が2年後学期までに開講され、現行カリキュラムがほぼ一巡することになる。年次進行に伴い3年次に新規に開講されるのは、「ビジネスイングリッシュ」だけである。
- 2) 学習時間数とは、予習や課題等の授業外での学習を含めず、授業内に限定した合計学習時間を指す。
- 3) TOEIC 対応科目だけでなく、一部の他科目の期末試験においても、全クラス統一テストが試みられたが、準備の煩雑さと担当教員ごとに設定されている授業内容と直接合致しないという点から、導入早々に取り止められた。
- 4) 前述の必修科目には選択必修科目を含み、一部の学生には3科目3単位以上の履修が卒業要件となっているという点では正確な記述ではないが、現行カリキュラムの本質を語るには不要と判断し簡略化して捉えることとする。また理論上というのは、3年次以降の時間割には教養英語に割り当てられた時間枠がないので、1年次・2年次用の英語科目の開講時間枠の中で受講しなければならず、その英語時間枠と専門必修科目の時間枠が重なって現実的には英語を履修できない学部や学科があるかもしれないという意味である。
- 5) TOEIC スコアを選択科目の受講条件とすることの是非は意見の分かれるところであろうが、本稿において議論するつもりはない。ただし、自前で統一基準の全学共通テストを準備することができないのであれば、何らかの外部試験を利用しない限り、習熟度別科目を受講するための客観的基準を定めることはできない、
ということは指摘しておきたい。
- 6) 1年前学期には必修科目「英語演習Ⅰ」と「英語コミュニケーションⅠ」を履修し、後学期以降履修可能となる選択科目は「英語コミュニケーションⅡ」を除いたすべての科目で TOEIC スコアによる履修条件が課せられている。
- 7) 「基礎英語演習」の単位修得のためには、TOEIC400 点以上取得する、または授業内に10回実施されるテストで60%以上取得しなければならない。
- 8) 最高点とは、前学期期末試験を含む4月から10月までに受験した TOEIC の最高スコアを示す。このスコアに基づいて、後学期選択科目の受講の可否が決められる。
- 9) 期末試験以外に実施される TOEIC は、大学院受験のために必要なスコアをめざす学生や平成18年度カリキュラムの「TOEIC 演習」不合格者などの1年次生以外の学生も多く含まれているため、単純な受験生数と後学期選択科目の受講に向けた1年次生の積極的な受験とは一致しないので、ここでは受講資格スコア獲得者数に注目した。
- 10) 授業で用いられる教科書は集計から除いている。
- 11) 2012年度までも、前学期期末試験以降から後学期開始までに TOEIC テストを受験し400点以上のスコアを獲得することで「TOEIC 演習」の合格となる学生数は毎年数名程度いたが、この表には含まれていない。
- 12) 2014年度入学生で、期末試験以降10月以前に TOEIC を受験し、400点以上のスコアを取得して合格となった学生は43人いる。
- 13) 理学部のように2014年4月から10月にかけて400点以下の学生数が1人増えているのは、それまで TOEIC 受けていなかった学生がこの期間に受験して、400点未満のスコアを取得したためである。その意味では、人数に変化

が見えない学部においても、そのような増減が含まれているかもしれないが、極わずかな人数であり大きな流れを知るには必要のないものと捉える。

- 14) TOEIC400点を満たさなくても、「基礎英語演習」に合格する道が残されているので、これらの学生が今後スコアアップに挑戦するのか、あるいは選択科目を受講することなく卒業するのかは、今後とも注視していく必要がある。
- 15) 平成25年度(2013年度)第2回英語科目部運営委員会(5月23日)資料に基づく。
- 16) 2013年度に関する調査では実際の履修者数を示しているが、2014年度はデータ抽出時に正確な受講者数が未定であったために、第1希望者数を採用している。しかしながら、ある意味では「第1希望」に着目した調査方法のほうが学生の動向を正しく反映しているといえるかもしれない。
- 17) 期末試験単独で見れば英語力に大きな変化はみられないため、英語力が向上した結果であると短絡的に喜んではならないかもしれないが、自主的にTOEICを複数回受験する学生数は増加している。

参考文献

1. 小町将之, 小早川真由美, 高瀬祐子, 松野和子, 「静岡大学の教養教育における英語教育システム改善の試み」『静岡大学教育研究』第10号, pp.55-66, (2014).
2. 厨子光政, 佐藤健, 「新カリキュラムにおけるTOEIC導入の正課と課題について」『静岡大学教育研究』第3号, pp.24-31, (2007).
3. 溪村和明, Jeffrey D. Shaffer, 小町将之, 「静岡大学における「実用英語」教育プログラムの現状と課題」『静岡大学教育研究』第6号, pp.9-16, (2010).
4. 静岡大学教養部, 『学生便覧』, (1993).
5. 静岡大学教養教育委員会, 『全学共通科目履修案内』, (2000).
6. 静岡大学大学教育センター, 『全学教育科目履修案内』, (2006).
7. 静岡大学大学教育センター, 『全学教育科目履修案内』, (2013).
8. 静岡大学情報学部, 『Joy 風』Vol.13, (2014).